

世界的な視野をもって日本の近代化を考えた

まなびや

橋本左内

『激流に耐えうる
ゆるぎない信念をもて』



『啓発録』原寸複製 【展示室B】

【展示室B】

▼福井ゆかりの教育者

橋本左内は、藩医の子として生まれ、15歳で『啓発録』(けいはつろく)「をあらわしています。16歳で緒方洪庵の適塾(大阪)で医学と蘭学を学びました。やがて松平春嶽に見いだされ、側近として活躍し、西郷隆盛ら諸藩の有志と親交を結びました。嘉永元(一八四八)年、左内は自分の言動を戒めるために、15歳(満14歳)にして『啓発録』をあらわしました。「稚心を去る」「氣を振るう」「志を立てる」「学に勉める」「交友を択ぶ」の五項目を、以後の人生の指針として学問に励もうとする強い意志が記されています。

去稚心

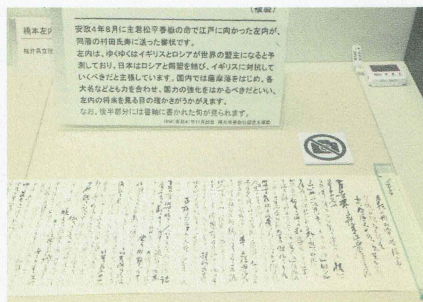
稚心トハチサナ心ト云事ニテ俗ニイフワラビシキコト也果シテ類ノイマダ熟セザルヲモ稚トイフ稚トハスベテ水クサ

『啓発録』 去稚心(抜粋)

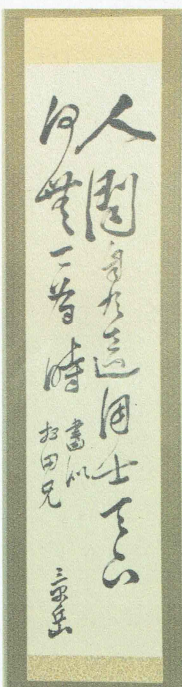
人間自有適用士 天下何無可為時

「大意」世間には自ずと有用の士がおり、天下には必ず彼らが事をなすべき時がくる

▼左内は、ゆくゆくはイギリスとロシアが世界の盟主になると予測しており、日本はロシアと同盟を結び、イギリスに対抗していくべきだと主張しています。国内では薩摩藩をはじめ、各大名などとも力を合わせ、国内の強化をはかるべきといい、左内の将来を見る目の確かさがうかがえます。書簡の句を書軸に書す。



橋本左内書簡(村田氏寿宛)



左内書軸(複製)

西郷隆盛と橋本左内

～永遠の友情は消えず～

幕末に多くの有志を亡くす結果となった「安政の大獄」で、西郷隆盛が最もその死を悼んだのが越前福井藩士の橋本左内でした。生前二人はお互いを認め合い親交が厚く、西郷隆盛は「我、先輩においては(水戸学の大家)藤田東湖に服し、同輩においては橋本左内に服す」と述べています。尋常小学修身書「度量」では、そのエピソードが掲載されています。



尋常小学修身書・巻五「度量」